

目的 既報の、理論食料費試算から導かれた食料費差の分析方法を用いて、世帯主の年齢階級別に、各世帯群の食料費の分析検討を行ない、実態食料費のちがいと、その差の背後にある食生活の変容の関連を明確にしようとした。これは、家族周期の視点に立って食料費の設計を行なおうとする時、単なる栄養購入面の消費単位的レベルに止めず、世帯主の年齢からくる食生活観や食生活様式の好みのちがいなど、人間らしい生活感覚も盛り込めるものに改善していく、手かかりを得たいと思うからである。

方法 家計調査年報の「世帯主の年齢階級別/世帯当たり年間の品目別支出金額、購入数量(全世帯)」を資料として、10群の年齢階級の实態食料費・理論食料費を検討した。基準には全世帯・年平均を当てた。外食費の検討には外食費率「 $(\text{外食費}/\text{実態食料費}) \times 100$ 」を利用し、実態基礎食料費(実態食料費-外食費)の検討には、基準との差の金額を、これを形成した食糧構成・食品の価格・栄養購入量の3要因に分割し、実数で差の構造をあらわし、食生活の変容との関連づけを容易にするよう努力した。さらに実態食料費の比率(既報)も併用して、検討の視点と多角的にする工夫も行なった。

結果 20才代特に「~24才」の外食費率が高く、食料費の約1/4が外食に当てられており、「65才~」の約1/10と対照的である。年齢階級間の実態基礎食料費差を形成する最大の要因は栄養購入量の差によるもので、他要因に比べ圧倒的に大きい。食糧構成のちがいによる差は、20才代(経済的なパターンをもつ)を除けば、年齢階級間の差は小さい。価格は、年齢の上昇と並行して高価なものを選んでいくことがわかった。